

《研究ノート》

窮民について(1)

野崎氏隆

(1)

エンゲルスは、『イギリスにおける労働者階級の状態』の1892年ドイツ語版への序言の中で、つぎのようにのべている。

(* 上記著書は以下では、エンゲルスの『状態』と記す)

「私が、1844年にはまだほとんど牧歌的である、とするすことのできた全地域が、いまでは、都市の膨脹につれて、貧民街と同じような腐敗した、住居に適さない、悲惨な状態におちこんでいる。豚や廃物の山は、もちろんもう許されない。ブルジョアジーは、労働者階級の不幸をかくす技術ではさらに進歩した。けれども、労働者住宅についてはすこしも本質的な進歩が生じていないことは、1885年の“貧民の住宅にかんする”勅命委員会の調査報告が十分に証明している」⁽¹⁾

なぜ、こんなところに「豚」が登場するのだろうか、というおそろしく直接的な疑問を、もう20年以上も前、この文章をはじめて読んだ私はいだいたのだった。「豚」「豚小屋」はしばしば侮蔑の言葉として、また、不潔さや悪臭の代名詞に使われる。で私は、老エンゲルス⁽²⁾はここでそのようなアレゴリカルな意味で使ったのだらうと解したのである。エンゲルスの『状態』を読んで、それはアレゴリーではなくまさしく生きた豚そのものだということは、すくなくとも観念的にはわかった。(全集、Ⅱ、282、283参照)しかし、なんとなくしっくりしないままで今日に至ったのだが、『状態』の豚の舞台がマンチェスターの労働者住宅街だったのに、そして『状態』から半世紀もたっているのに、イギリスの首都ロンドンの貧民街に、また豚がでてきたのに驚いたのである。ロンドンの豚を紹介してくれたのがこ

ここに訳出した，“THE BITTER CRY OF OUTCAST LONDON” という小冊子であった。（* 以下に たんに BITTER CRY と略称することがある）

いうまでもなく、このノートの目的は豚の研究ではない。前稿でいささか「富」を論じたのだが、「資本制蓄積の一般的法則」がさし示すように、私の研究は、同時に他の極で蓄積される「貧困」へと向かわざるをえないようである。この小冊子の訳出はその方向へのささやかな一歩にすぎないが、おおむねつぎのことを教えてくれる。

第1に、エンゲルスのさきの著作の刊行（1845年）や、マルクスのロンドン亡命（1849年）から、2人の死までの半世紀を完全におおう、イギリス史上空前の繁栄期といわれるヴィクトリア時代の、その絢爛たる舞台の裏側の、ロンドンという世界最大の都会の貧民の状態を、社会学者の眼でなく、また公的な統計数字でもなく、house after house, court after court, street after street (BITTER CRY, 序) 式に、一戸一戸扉をたたき、その中にはいつていった一人の牧師の眼をとおして見ることができること。

第2に、さきに引用した序言に、「豚や廃物の山はもう許されない」とあるのは、遠くの方から眺めた社会の表面にすぎなくて、「本質的な進歩は生じていない」ことを、検証することができるということ。

第3に、ほとんど同時代とみなしうる1890年代に、ベルンシュタインを先頭に反マルクス理論が抬頭し、貧困の理論にたいしても、もはやすべての人々によってそれは放棄された、と揚言しはじめることにたいして、この小冊子は、事実をもって対抗していること。

最後に、本冊子が世に出たのは、イギリス資本主義の歴史の上では、産業革命後半世紀の時点である。いま、この半世紀を機械的に日本資本主義の歴史にあてはめれば、1950年代にあたる。人はこの両時代の社会状態を現象的に比較することによって、もはや日本には、マルクスの言うような「貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落」⁽³⁾はなくなった、

と言う。この小冊子は、1950年代の日本の「働く貧民、すなわち、賃金労働者」⁽⁴⁾は、住居の中で豚を飼うような無知な状態にはないことを教えてくれるのだろうか。私にはそうは思われたいのだ。それは「兎小屋」の中では豚さえ飼えないということを教えているように思われるのである。

プレハーノフ流に矮小化された絶対的貧困論にさえ、現実を前にしては首肯せざるをえない日本の1980年代は、ちょうど1世紀をへだてて、あらためてこの小冊子の行間ににじみでる貧困の問題に目をむけさせないではおかない。

* 注は () 内数字で稿末に、訳注は○内一連番号で各小節末につけた。

(2)

『見捨てられたロンドンの悲痛な叫び』⁽⁵⁾

窮民の状態に関する一研究

これは、次の諸小節から成る。⁽⁶⁾

- 一. (序) (* 原文には記されていない)
- 二. 礼拝への不参加
- 三. 生活条件
- 四. 不道徳
- 五. 貧困
- 六. 極貧
- 七. 行動提案
- 八. 諸地区の説明

一.

社会の貧しく見捨てられた諸階層の人々にたいして、今日、キリスト教会によって注がれる関心の増大ほど頼もしいことはあるまい。これらの人々について、教会はこれまでなおざりにしてきたわけでは決してない。もしそうだったとしたら、教会はとっくに神のものであることをやめていただろう。だが、教会はこれまでのところ貧しい人々にたいする伝道を不完全にしかやってこなかったのである。最近まで教会は、ある外部の機関を

もりたてることで満足してきた。その手に余ることについては、表面的で不十分な地区巡回や、いくぶん不見識な慈善物資の配給、それに、もっと貧しい人々をよせ集めて、あき部屋をあちこち探してやり、そのうちのいく人かを救済してやることで満足していたのである。これはみな、それなりにいいことだし、成果をあげてきた、しかし、そのすべてが、貧困、悲惨、むさくるしさ、そして不道徳といった大きく暗い領域のほんの縁辺をなぞっているにすぎなかったのである。われわれは、ロンドン市伝道団（The London City Mission）の存在を知っている、その活動員たちはどこにでもいるし、そのけだかい仕事つまり調査活動は、以前にもましてますます高い評価をえている。しかし、とどのつまり、教会の人々は、文明と開化の薄皮におおいかくされて、われわれのこの巨大な都市のど真中でブブブッあわ立っているのが道徳的頹廢であり、胸もつぶれるばかりの悲惨であり、そして絶対的な神の不在の大きなかたまりだということ、さらにそれを浄化し、それをとりのぞくことのできるわずかな力さえ、このおそるべき泥沼の中にそそごうとするほとんどなんの努力もされていないということに気づきはじめていたのである。

（2—4） * 任意にコピー原文の頁数と行数を示した われわれが教会を建てたり、信仰で自分自身を慰めたり、至福の世の到来を夢みている間に、貧しい人々はますます貧しく、みじめな人々はいよいよみじめに、そして、不道徳な人々はいっそう墮落してきている、社会の最下層の人々を教会や礼拝堂から、文明と開化とから引き裂く深淵は日に日にひろがるばかりである。それにたいして、正反対の結論をさし示すような事実を並べたてたり、福音の恵みをもたらそうとして、悪の巣窟に攻め入る男女のけだかい軍勢^④について、伝道諸団体、感化院、収容所、禁酒協会から出版されるはげましの諸報告書について、劇場サービス、深夜の礼拝集会、特別布教活動について、語ることはたやすいことである。だが、それがどうだというのだ！ われわれは愚者の天国に住んでいるにすぎない、たとえこれらすべての諸機関がいっしょになって、なさるべき必要の千分の一がなされ、キリスト教会によってなされうることの百分の一がなされていると想像する

としても。われわれは諸事実に直面しなければならない、それはわれわれに“おそるべき罪と悲惨の洪水がいまわれらの上におよんでいる”という確信を強い、その確信は日ごとに高まっている。ここに述べることは、事がらのありのままの状態と、もっとも効果的と思われる救済活動とを発見する目的で引き受けられた、長い、忍耐強い、真面目な研究の結果である。すべてのキリスト教の宗派によって——たとい宗派の目的に沿わなくても——結合され組織化された努力がなさるべき時だという確信のもとにロンドン組合派教会連合 (the London Congregational Union)^② は、首都の最下層の貧困な数地区における伝道活動の基盤として、適当な会館 (Mission Hall) の開設を決定した。このように人々は熱心に仕事をしてきたし、その成果のいくつかは以下に述べられるだろう。願わくは力あるすべての人々が、この困難な大事業に着手した教会連合を支援激励されんことを。(“…”については稿末訳注補足)

(2-38) 2つのことを心にとめておくことが大切であろう。その第1は、この報告が、‘選択された事がらに言及しているのではない’ということである。(‘…’の部分は原文イタリック体) それはただ家から家へ、囲い地 (courts) から囲い地へ^③、道路から道路へと、見いだされたいろいろな事がらのありのままの状態を明らかにしているにすぎない。第2に、‘絶対に誇張はない’ということである。それはありのままの事実のありのままの列挙である。実際、ひとつの家から次の家へと短時間の巡回において発見された、恐怖と汚辱のありのままの陳述を、立派な出版業者なら出版しようとはすまいし、上品な家族ならそれを認めようとさえしないだろうことは、たしかである。‘感情に訴え、事実を最も悪く見せることを、絶対に避けて、すべてのことを調子をやわらげて述べざるをえなかったし、もっとも知ってもらいたいことは、完全に除外しなければならなかった、さもないと、読者の耳目を堪えがたいまでに踏みこむからである’だが、この抑制された叙述でさえ、すべてのキリスト教徒の心にとっては、それを満たしてやることこそ教会の最高の使命であるところの、助けを求めるあらゆる悲痛的な叫び、であらねばならない。われわれの調査は夏に行なわれ

たことをつけ加えておかねばならぬ。貧しい人々の生活条件は、冬の数ヶ月の間はるかに悪いにちがいならからである。

訳注

① William Booth (1828~1912) 1865年ロンドン貧民街の伝道を志し、1878年救世軍を組織する。

② 本冊子末尾後書に次の小文がある。

All communications should be addressed to Rev. ANDREW MEARNS, London Congregational Union, Memorial Hall, Farringdon Street, E. C.

“GUIDE TO LONDON”, 1928, p. 189 のメモリアル・ホールについての次の説明から、Congregational Union (body) の成立の事情をうかがうことができる。

The Memorial Hall, long the head-quarters of the Congregational body, was built in 1874 in memory of the “fidelity to conscience” of the 2,000 ministers ejected from the Church in 1662 by the Act of Uniformity.

③ courts という語は、中庭、裏庭などの訳があるが、筆者は、エンゲルスの先出の著書を「全集」に訳された岡茂男氏の訳語「囲い地」が、このような文中の courts には適訳と考え、使用させていただいた。なお courts についてはエンゲルス先出著書「大都市」の章に、図入りで詳細な記述がある。(全集, Ⅱ, 284以下参照)

二. 礼拝への不参加^④

(3—17) 問題の階級を構成している何百何千という人々のうち、きわめて少数しか礼拝所に顔を出さないということは、たぶんほとんど言う必要もないことかもしれない。それはごく言いふるされたことだし、つづけて述べなければならないことに比すれば、きわめて小さなことにすぎないが、事実の正しい報告にとっては必要なことである。より下層の、どん底の人々——われわれの調査は主としてここで行なわれたのだが——のところへ行く前に、オールド・フォード (Old Ford)^⑤ の近辺でつぎのこと

を知る。そこには147の棟割長屋 (consecutive houses) があり、その大部分には尊敬すべき労働者階級の212世帯が住んでいる。そのうち118世帯は、どんな場合にもけっして礼拝所に行かないのである。ボウ (Bow) 地区の公共住宅の長屋には、2,290人が住んでいて、うちわずかに大人88人子供48人がいつも礼拝所へ出かける、そしてこれら (=大人) のうち64人は1つのミッション・ホールに所属しているから、残りの24人は他所で礼拝するわけである。レスター広場から分かれるある街筋には246世帯が住んでいるが、いつも教会に行くのはわずかの12世帯である。ペントヴィルのいまひとつの街では100世帯でたった12人、いっぽう、セント・ジョージ寺院 (in-the-East) の一地区の教会出席者は4,235人中39人である。これらの数字は年に1回か2回なにかの慈善物資をもらい教会に行くだけのような人も含めてあるので、事実よりかなり多めになっているだろう。われわれはしばしば、20年間、28年間、いや30年以上も、教会か礼拝堂 (chapel) を訪れたことの全然ない人々、また64才にもなっていて、礼拝所 (a place of worship) に行った記憶の全くないという人々に出会うのである。実際、ほんのわずかの人々をのぞいて、教会に行くという考えはこれらの人々にはけっして浮びもしなかったのである。だが、あやしむにあたらない。思ってもみよ彼らの生活条件を。

④ この節と第七節は一読してあまりに宗教色、伝道活動に関する叙述が多いので、はじめ、ここに訳出することをやめるつもりだった。しかし、宗教的世界とりわけ西欧キリスト教世界に無縁な筆者のそのような選択は、きわめて不当のように思われるので訳出した。あとの方に出てくるように、窮民の一人が「私は日曜日にも、教会に行かないでマッチ箱を作らなければならなかった」と言っているように、礼拝に行かないということ自体が貧しさの決定的様相でもあるのである。したがって、著者自身この節には非常にひかえめであり、紙面も他の節の $\frac{1}{3}$ もしくは $\frac{1}{4}$ にすぎないが、ここにあらわれた数字は、われわれの想像にあまる貧困の実相を秘めているのである。

⑤ Old Ford : 所謂 East-End 地区北東周辺にあたる地域。

三. 生活条件

(4—5) われわれは彼らの家庭の状況を言っているのではない、なぜなら、どうしてそこを家庭と呼びえようか、それに比すれば、野獣の穴ぐらでさえ快適で健康的な場所だろうから。以下のページを読む人で、不衛生な共同住宅なるものがいかなるものか、ご存知の方はほとんどあるまい。そこは何万という人々が、奴隸船航路 (the middle passage)^⑨ について聞く話を思い出すような恐怖の真只中で、群り住んでいる場所である。住宅にはいるには囲い地を通らなければならないが、そこは、手あたり次第に放置された廃棄物や下水だまり^⑩ からたちのぼるひどい悪臭に満ちていて、汚物はしばしば足もとにあふれている。囲い地の多くは全く日は射さず、新鮮な空気の通うこともない、そしてそこは一滴の消毒液の効果さえほとんど無縁の場所である。われわれは腐朽した階段をのぼっていかなければならないが、それは一步一步いまにも崩れそうだし、いくつかの場所ではすでにこわれていて、不注意な人なら、生命にかかわりそうなすき間さえあいている。さらに、虫けらのウジャウジャしている暗い不潔な廊下を手探りで進んでいかなければならない。さて、もしあなた方が、堪え難い悪臭によって押しもどされることがないなら、あなた方と同様まぎれもなく人間という種族に属し、イエス・キリストの死によって神の恩寵にあずかりうるはずの同じ人間である、何千という人々が群り住んでいる巢窟にはいることができるであろう。あなた方はこれまでに、鉄道線路のガード下や荷車や樽の中、もしくは露天のかくれ場所に身をよせて眠る動物たちをあわれと思ったことがおありだろうか、ここ (rookery) にかくれ家を求めねばならないさだめの人々にくらべれば、その動物たちはまだ羨まれてもいいということがおわかりになるだろう。8フィート平方——これが大部分の部屋の平均的な広さである。壁と天井は長い年月放置されて積りにつもった汚物の付着物でまっ黒である。汚物は天井板のさげ目から滲み出し、壁を伝って、所かまわず流れおちている。名ばかりの窓はと言えば、その半分はボロ切れがつめこんであるか、風雨を防ぐために板が打

ちつけてあり、のこり半分は、よごれすぎくもりすぎて、ほとんど採光はなく、外はなんにも見えない。かりに屋根裏部屋へ上ったとしよう、そこはつつ抜けのもしくはこわれた窓ごしに、いくらかなりとも新鮮な空気にふれることができるし、安普請の割貸間 (tenements)^⑨ の屋根や張出し部屋ごしに、外が見える。あなた方はそこではじめて部屋の中にはいってくる悪い空気が、腐敗した猫や鳥の死骸、いやそれよりもっといやらしい汚物の上を通して来なければならぬ事情がわかるだろう。建物自体が、風がちょっと吹きつけるだけで、居住者たちの頭上でぐらつくのではないかと考えざるをえないような状態にあるのである。家具について言えば、あなた方はたまたまこわれた椅子やぐらぐらする古ベッドの残骸、それともテーブルの破片を眼にとめるかもしれないが、もっと普通に見かけるのは、レンガの上のにのつけられた荒けずりの板、ひっくり返した詰めかごや木箱といったいろいろな、粗末な代用物で、さらにしばしば眼にするのは塵芥やボロぎれ以外のなにものでもないのである。

(5—12) (注. 5, 二), 仁賀町問ヶ所 これら腐朽して臭気のただようテネメント・ハウスの部屋々は、1家族しばしば2家族を収容している。(8フィート平方の部屋にだ、筆者) ある衛生検査官は、1つの地下住宅^⑩で父と母、3人の子供、それに4匹の豚を発見したと報告している！(傍点筆者) ある伝道師は別の部屋で、痘瘡を病む一人の男を発見した、その妻は8回目の産褥から離れたばかりで、裸同然の子供たちは泥だらけで走りまわっていた。ひとつの地下の調理場には7人の人が住んでおり、同じその場には赤ん坊が死んだまま横たわっていた。もっと別の所には、貧しい寡婦が、3人の子供と、死んで13日たった1人の子供をかかえて住んでいた。その夫は辻馬車の御者で、つい最近自殺したばかりだった。29才と21才の娘、27才の息子をふくめて6人の子供をもつ寡婦がいる。また他のテネメントには、両親と6人の子供がい、子供の2人は猩紅熱にかかっているのである。別のところでは29才をかしらに9人の兄弟姉妹が寝食を共にしている。宵の口から子供たちを街頭に追っ払う母親がいる、それは、あわれな子供たちがどこか他所にみじめなかくれ場を探し出せないで、なんとか這いもどっ

て来るまでの夜半すぎまで、部屋を不道德な目的に使うためなのである。ベッドがあるといっても、それはたんきたらしいポロか、鉤くずや麦わらの山にすぎず、でなければたいていの人々は不潔な板敷にわずかに休息をみいだすにすぎない。間借人である寡婦が部屋にあるたったひとつのベッドを占領し、床を、1組の夫婦に週2 シリング 6 ペンスで又貸ししている所もあった。多くの場合、このような人々によって不健全な居住の仕方がつづけられ、事態はますます悪化していくばかりである。ここにくると、人は微小な柔毛の浮遊している空気息をつまらせるのだが、それは毛皮商人に売るための兎、鼠、犬その他の動物の皮の抜け毛なのである^⑩。ここでは、いろいろな吐き気をもよおす臭気にまじった、糊やマッチ箱を乾燥させるにおいが人を圧倒する。それに、前の日に買って一晩部屋においてあったような新鮮なものではなく、もう古臭くなった魚や野菜のにおいもはいつてくるだろう。人々は、可能な場合でもめったに窓をあけようとはしない、が、たとえあけたとしてもそれがいいかどうか疑問なのである。というのは、外気は室内の空気にくらべて汚染のひどさがほとんどかわらないからである。

(6-8) これらの部屋々々がいかに貧しくあさましかろうとも、なんとか生計を立てようと一日じゅう歩きまわり、夜ともなるとおびただしい数の木賃宿 (the common lodging-houses) に休息の場所をもとめる大勢の人々にくらべれば、まだ資力の上で勝っているのである。木賃宿はしばしば泥棒たちや最下層の浮浪者たちの巣窟であり、そのいくつかは故買者によって経営されている。そこの調理場では大勢の男女が、自分の食べ物をこしらえたり、洗濯したり、ぶらついて、煙草をすったり賭けごとをしている。寝部屋 (sleeping room) を見てみよう。両側にベッドの長い列が並び、ときとして、1部屋に60~80床もある。多くの場合、男女が、最低の身嗜みを保とうとするなんらの試みもなしに、そこに群り集まることさえ許されている。だがもっともどどん底もあるのだ。何百という人々が、このあつ苦しい公衆寝部屋での休息の特権を確保するに必要なわずか2ペンスの金をかき集めることさえできないのである、そして彼らは階

段や踊場に群り蹲る，そんな場所に早朝，6人や8人見かけることはけっして珍らしいことではない。

かかる条件の下に生きる宿命を負わされた人々が，酒に溺れ罪におちることは，たしかにほとんど驚ろくに足りぬことである。われわれは最近の信頼しうる1人の調査官にならって，むしろつぎのように言いたい，すなわち，彼らは「彼らが現在そうであるよりも20倍も墮落していないことを是とさるべき」なのである。ところでこのすし詰め状態 (over-crowding) の最も悲しむべき結果のひとつは，善良なる人々の犯罪者との不可避の結びつきである。しばしば律義な労働者家族が余儀なく盗人の食卓の厄介になってしまい，彼らが暮している住宅においては，彼らの部屋と部屋とはとなり合っており，われわれの努力目標からそれてしまった最も邪悪な人々との不断の接触は必要なことなのである。疑いもなく，多くの常習犯罪者たちは，もしも彼らが，環境の力によって，この貧民窟の中で，罪にこり固まった人々と混淆することがなかったならば，こんなことにはけっしてならなかつたらうに。誰があやしもうか，かかる悪徳と疾病との温床にこそすべての悪が栄えることを？ 誰が疑おうか，幼児たちをその健かなる日に，再び以前の悲惨に連れもどされる恐れをのりこえて，この茅屋から慈善の呼び声へと連れ出すことを？

(7-1) かかる生活条件からの解放を約束する不倫の生活への誘いに，若い娘たちのよろめき転落することに，なんの不思議があろうか？ 居酒屋が，仕事に疲れ果てた人々の楽園であることになんどの不思議があろうか？

- ⑥ middle passage : 西アフリカから西インド諸島への最も長い奴隷貿易船航路。
- ⑦ 「囲い地」とは要するに現代日本の集合住宅につきものの dust chute の萌芽形態なのである。囲い地をとりまく家々，部屋々々からあらゆる塵芥，汚物，残飯，廃棄物はここに投げ捨てられる。そこに養豚業者が目をつけて一隅を借りて豚小屋を作れば，飼料の心配なく豚は肥るというわけである。汚水がなぜたまるか

といえ、たいていここに共同の井戸、洗濯場、炊事場があり、一日中水を使い、往々外側の街路面より低いために雨水はすべてここに流れこむ（全集、Ⅱ、285）したがってここに作られた共同便所はそのたびあふれて汚物が流れ出るのである。空気の流通について言えば、囲い地は周囲がテネメントやロッキング・ハウスにぎっしりと巻かれ、通常街路から1つまたは2つの細い通路がある。その通路も家と家の間のすき間ではなく、ピロティ方式に、通路の上に2階の部屋がのっかってフタをしており、通路の内と外には戸もあり鍵もかかるようになっている。したがって全く通風がないのである。

- ⑧ **tenments**：産業革命期からイギリス、工業都市の人口密集地帯に建てられた代表的労働者住宅で、日本流に言えば棟割長屋である。「屋根の低い労働者の小屋」（『状態』、全集、Ⅱ、286）がこれである。「（イースト・エンド）界隈の煉瓦建てのテネメント・ハウスという貧民長屋が、取り壊されたのは、第2次大戦後のことである」（早川書房、『ミステリマガジン』、247号）
- ⑨ **cellar** というと建物の付属物で物置や貯蔵庫のある所を連想するが、そうではない。「（家）にはじめじめして、きたならしい地下室住宅がついている」（『状態』、全集、Ⅱ、284）という風に、とくにロッキング・ハウスにおいては、地下も住宅として貸されるのである。なお、地下住宅については、次稿でもふれる。
- ⑩ ロンドン、イースト・エンドは当時公営屠殺場があり、それを目当ての毛皮商人の出入もあったと推測される。さらに商人たちに毛皮を売るための密殺密売も行なわれたにちがいない。

四. 不 道 徳^⑩

とは、このような諸条件の自然の発露にほかならない。「制度としての結婚は、これらの諸地区ではファッションブルではない」と言われているが、これはまさしく赤裸裸な真実である。これらの貧民窟にいっしょに住んでいる男や女たちに、結婚していますか？とたずねてみるがいい、あなたの愚鈍さは笑いを誘うことだろう。誰もそんなことは知らないし、気にもかけない、だいいち、男と女がそこに居るとき二人が夫婦であることなど、ここでは誰も期待しはしないのである。あなたの質問が肯定的に答えられるのは、ほんの例外的な場合だけである。近親相姦は普通のこと、そ

していかなる相の悪徳にも，肉欲の追求にも，おどろかさされたり，注意をひくようなことはないのである。結婚しているようにみえる人々も，ちょっとした喧嘩がもとで別れてしまうことはしばしばだし，またもとの親密な関係にもどることも躊躇しない。自分の3人の子供の母親である1人の女と，何年間も暮している1人の男が，評判になった。女が死に，それから1週間もしないうちに，彼は死んだ女のかわりに他の女をつれてきたのだった。ミント (Mint)^⑧ と呼ばれる下町に男と女が住んでいた。ある朝，男は押し込み強盗を働くためにもう1人の男と出かけたのだが，彼はいっしょに行った男に殺されたのである。殺した男はひきかえして，仲間はずかまり刑務所につれていかれた，と言って，その夜は殺された男の代りをつとめた。この点に関しての共産主義にたいするお節介は，警戒心であって道徳的なものではない。（これらの地区では）最もいまわしい諸行為が実際はもっとも些細な事とみなされている。ロンドンの下町は，まるで全国各地からおしよせ溢れた不潔さと忌まわしさと下水道溜である。すべての裁判所が泥棒，娼婦，保釈被告人たちでいっぱいである。

(7-33) 1つの街路には35軒の家があり，その32軒は公然たる娼家である。いまひとつの地区には，このような家が43軒あって，そこには428人の転落した女性たちがいる，彼女たちの多くは12才にもなっていない。その近隣の人口は1万1千人と報告されているが，^⑨それはこの不道徳な仕事に従事する400人を含んでおり，年齢は13才から50才までさまざまである。彼らの道徳的墮落についてはある見方がある。その見解はわれわれの注意をひいたつぎのような出来事から形成されるようである。イースト・エンド^⑩のある宣教師が，1人の少女を不道徳な生活から救いだし，外国へ行く人々と同行する仕事を彼女にみつけてやった。彼は少女をサウサンプトンまで見送ったのだが，帰ってくると少女の祖母にはげしく罵られたのである。なぜならこのあわれな老婆はそれによって生活の資をうばわれたからであり，近所の人々の同情をあつめていたのであった。

(8-5) これら諸地区における飲酒にもとづく悲惨と罪悪とは，しばしば語られてきた，しかし，その恐ろしさはペンや芸術家の筆によっては

けっして表わすことはできない。ユーストン・ロード (Euston Road: キングスクロスから南西方向に走る大通) 地区には、男女子供あわせて100人につき1軒の居酒屋 (public-house) がある。はやい話が、レスター広場近くのオレンジ街にあるわれわれの教会の周囲には、100軒の酒場 (gin-palace) ——ほとんどが非常に大きい——がある、そして以上の地区は、われわれがこれまで調査してきたすべての場所に存在するものの見本にすぎない。雑多であさましい群集にあふれる、これら眼もあやなサルーンを覗いてみるがいい、そうすれば、夜ごとそこで演じられる罪悪に思いを致して身の毛もよだつたことだろう、しかし、その背後のあの臭気に満ちた囲い地において見られるどのような住居とでもそれらを対比してみれば、その酒場に人々の群がり集まることに、もはやおどろきはしないだろう。その輝きとその興奮、そのかりそめの忘却が、何万もの人々のせめてもの天国なのである。どうしてその誘惑に抗することを彼らに期待しえようか? 彼らは、もし酒を飲まなければ、たとえ飲むことによって死にまさる悪を行なっていることを知っていても、生きていくことができないのである。

(8—23) ありとあらゆる墮落を、ここは彼らに教えてくれる。やっと歩けるほどの子供たちが盗みを教えこまれ、毎日の出稼ぎ (daily expeditions) からお金もしくは金目のものを持たずに帰れば情容赦なく打ちすえられるのである。子供たちの多くは、手をひかれあるいは腕に抱かれて酒場につれてこられる、そして母親たちがそのいとけない子供たちに、無理やりに火のような飲みものを飲ませるのを目撃するのも稀ではない。^⑩ 戸口や窓の下をぶらぶらしたり、街路を漁りまわっているうちに、あの有名な『40人の棒泥』一味の名うての数人の仲間がえらびだされると、彼らは——しばしば放埒な女たちとも共謀して——オクスフォード通りやリージェント通り、その他の街路で人々から強奪するために、暗くなってからでかけて行く。さて、あなたは1軒のコーヒー・ハウスの前を通りすぎる、服飾店がある、タバコ屋がある、食料品店がある、もちろんどこでもちゃんとした商いが行なわれている、だが、まったく別の、もっともっと

もうけの多い取引も同時に進行していて、とくにそれは夜になって本格的にはじまるのだ——不用心な人々をおとし入れるすべての詭計が。

上述の事柄は、このむさくるしい地域の住人たちが不可抗的に受けざるをえない道徳的影響をほんの一部示しているにすぎない、その影響によって「無邪気さのひとかけらもない子供が、つつしみも廉恥心もない若者が、苦悩と罪悪とだけにもまれぬいた大人が、そして、汚辱だけをその名の上に冠しうる失われた老人」^⑩が、生れ育ち生きていくのである。

(9-3) われわれが戦わなければならないもうひとつの困難、そして、これまで述べてきたことの大きな原因のひとつは、このあわれな見捨てられた人々の、貧困、である。 (続)

⑩ 著者は序文に、「すべてのことをやわかい調子でのべ、もっとも知ってもらいたいことは、完全に除外せざるをえなかった」と言っているが、聖職者として、もっともそうせざるをえなかったのはこの第四節であったろうと思われる。ここには、第1に性的無秩序、第2に飲酒による悲惨と犯罪、最後に道徳影響の子供への波及をとりあげている。犯罪の筆頭にあげらるべき殺人については、わずかに性的無秩序に関連して1ヶ所軽く触れたにすぎない。これは明らかにペンの抑制の結果に他ならないであろう。この訳注に、注5にふれた仁賀克雄氏の文を引用して、著者が「完全に除外せざるをえなかった」部分を補なおう。もちろん、事件そのものではなく、その社会的背景である。

ジャックの事件は、1888年の秋である。その前年に、ヴィクトリア女王在位50年の「ダイヤモンド祝典」が盛大に行なわれ直後であるところに、この事件の象徴性がある。

「正にヴィクトリア朝の最盛期に、この事件が起きているのは、決して偶然ではない。この時代の裏側には様々の悪徳、犯罪、貧困などが渦をまき、貴紳が地位と金に飽かせて悪徳を行えば、庶民は貧困と絶望から悪事を働いた。『ヴィクトリア朝犯罪史』によれば、一日に一件はロンドンで殺人事件があったという。(この時代の人々の犯罪や殺人への異常な嗜好の)背景には、公開処刑や残酷見世物などがある。1868年に廃止されるまで、ニューゲート監獄の正面で行なわれた公開処刑には、貴賤を問わず大勢の見物人が、斬首の刑をショウでも見るように集まり、そのサディスティックな欲望を満足させていた。」

「ホモ、マゾ、サドといった変態趣味が広く貴紳階級に流行したのもこの時

代だった……タイムズはじめ10数種の新聞が過当競争を演じ、絵入りで珍しい事件、奇怪な犯罪を好んで扱い、世人の嗜好に迎合していた」

「(ジャック事件の起きたホワイトチャペル地区)の近くには、ロンドン・ドック、野菜や肉の卸売市場があり、町には異様な悪臭が漂っていた。住民は工場やドックで働いたり、牛豚の屠殺に携っている者もあり、(公営の屠殺場でさえ)白屋人目につくところで屠殺が行われていたから、血生臭いことに不感症になっていた嫌いもある」(早川書房、『ミステリマガジン』273号)

ジャック事件の犠牲者はすべて、夫も子供もある30~40才台の娼婦である。そしてたとえばその第2の事件を見ると、ハンベリー・ストリートにある古いロッキング・ハウス裏の「囲い地」内で起きている。「囲い地」が道路警察も敬遠する無法地帯であり、犯罪の温床でもあったことを物語る。

⑫ Mint 地区：ロンドン塔の東隣りが Royal Mint (造幣局) であり、この周辺地区のこと。Mint のすぐ南から、所謂ドック地帯がはじまる。

⑬ 「ロンドンにはおよそ20の大きな貧民窟があって、それぞれに一万人強の人間が住んでいるが……」(『資本論』全集、XVIII- b, 859, ただしこれは1860年代の記録である。一筆者)

「1850年頃のロンドンの人口は240万というから、88年頃は300万近かったろうと思われる」(早川書房『ミステリマガジン』, 273号)

「イースト・エンドには90万人の下層階級が住んでいた」「住民の10%に当る9万人が職もない極貧層で(あった)」「ホワイトチャペル界限には、8万人が住んでいた」「(そこだけで)娼婦が1,200人ばかりいたという。それも人妻が多かった」(早川書房『ミステリマガジン』, 273号)

⑭ これまでもすでに East-End という地域表現を使ってきたが、ここで正確な定義を見ておく。

that part of London which extends from Hoxton southeastward to the Albert Docks, embracing Bethnal Green, Bow, Poplar, Stepney, Whitechapel, etc., sometimes, but erroneously, extended to embrace a region south of the Thames and east of Peckham Rye. (Funk & Wagnalls New Standard Dictionary of the English Language, 1931)

⑮ みごとに抑制された叙述の中で、このパラグラフは最も衝撃的な部分のひとつである。これが衝撃的であるのは、たんに描写された事柄のあさましき、むごたらしさだけでなく、その事柄の本質がはるかな時・空を超え、様相の変化をこえて、今日にまで

も生々しい問いをなげかけている点である。ここに登場する母親たちは、マルクスが資本論第1部第4篇で相対的剰余価値の生産を論じたなかで „die unnatürliche Entfremdung der Mütter gegen ihre Kinder“ (*Das Kapital*, Bd. I, S. 420) と規定した状況に、より深くのめりこんでいる。なぜ彼女たちは、子供に「火のような飲料を無理にも飲ませる」のか？ 著者の筆は、その分析の手前でからも抑えられている。

資本論の母親たちにもどろう。彼女らは、産業革命期後半から19世紀中葉にかけて、資本によって取得されていく補助労働力の提供者としての『労働婦人』たちであり、マルクスは労働婦人とその子供たちの関係を次のように分析する。『母親の家庭外就業』は『子供の放任と虐待』へと進み、さらに『不適當な食物、食物の不足、麻酔薬の付与』となり、最後には『わざと食物を与えなかったり、毒物を与えたり』して死に至らしめる、と。さきの引用中の「不自然な疎隔」状況のいたましさは、子供を死に至らしめることにさえ、母親が、もはや無感動である。という点である。なぜ子供に『ゴドフリ気つけ薬 (強壯剤, 清涼飲料とも訳されている)] を飲ませたのか？ それは当時のはげしい強制労働の中で、子供をおとなしくさせなければならなかったからに他ならない。ゴドフリ飲料は『一種の阿片剤』であり、強壯剤、気つけ薬とは巧妙な売薬名にすぎず、「強壯剤」ではなく「衰弱剤」、「気つけ薬」ではなく逆に「気が遠くなる薬」だったのだ。ところでこちらの母親たちはどうか？ 「労働婦人」として工場にいるのではない、酒場に酒を飲みに来ているのである。だが、「労働婦人」として子供が仕事の邪魔になったように、酒場の婦人もまた子供が目ざめ、泣きわめき、走りまわることには邪魔だったのだ、だから「ゴトフリ」ではなく「酒」を与えて子供を酔いつぶしたのであって、無知な子供への愛情がさせたのでは絶対でない。

Entfremdung は哲学用語としては普通「疎外」と訳され、われわれはこれを「おのれの作り出したものが、もはやおのれの意のままにならず、かえって敵対的なものとしてあらわれる状況」と理解する。

おのれの生んだ子供が邪魔になり「敵対的なもの」となり、ついにはそれを抹殺してしまう。これが「母親の子供にたいする不自然な疎隔」(全集 XXIII, a, 519) である。私は、1880年代の状況を「より深くのめりこんだ」疎隔と言った。「労働婦人」はすくなくとも強制労働をやりぬくために、疎隔状況へと落ちこんでい

ったのだが、酒場の母親にどんな労働、どんな大義名分があったのであろう。著者は、いともやわらかな調子で、それを「もっともうけの多い取引」と表現しているのである。ここに、より進行した形の「より不自然な疎隔」状況があるのだ。

ちなみに、20世紀80年代の状況はどうか？ 「まあ！ひどい」と、もしこの小冊子を目にする日本の母親がいたら、異口同音に叫ぶだろう。いま日本の母親と子供は、現象的には疎隔などではなくむしろ「密着」であるように思われる。注意してもういちど周到なマルクスの言葉を見なければならぬ、彼は、たんに母親の疎隔とは言っていない、「不自然な」疎隔と言っている。子供は母親から、母親も子供から「自然に」疎隔していくべきものではないのか？ 「老いては子に従へ」「可愛い子には旅をさせよ」とは、親と子の「自然の疎隔」の日本流の表現ではないのか？ この「自然の疎隔」は、いまや日本では、ドロドロの「密着」「癒着」によって否定されている。これはしょせん「不自然な疎隔」のメタモルフォーゼにすぎないであろう。

19世紀前半の多くの子供たちが、その母親の「不自然な疎隔」によって『老人のようにしなびていき、猿のようになって死んだ』

19世紀末の窮民の子らは、母親の子らにたいする「より深い不自然な疎隔」の中で、酔眼もうろうとして「無邪気さなどひとかけらもない子供」に育ていった。

さて、20世紀80年代の日本の子供はどうか？ 主観的には「疎隔」ではないと思こんでいる愚かな母親たちのその子供にたいする「変質した不自然な疎隔」は、いまその子供たちを、暴力をもって当の母親に敵対する化物に育てあげている。(訳注⑯の文中の『 』部分は、『資本論』全集、XXIII—a、第13章からの引用)

⑯ 引用記号が使っているが、出典は不明。

注

- (1) マルクス・エンゲルス全集、大月書店、第2巻、668頁(以下、次のように略記し、ローマ字で巻数、アラビア数字で頁を示す。全集、Ⅱ、668、なお、レーニン全集はレ・全集とし以下同じ)
- (2) この序言の最初にエンゲルスは自らこう書いている。「この著作は、1845年の夏にはじめて刊行された。よいにつけ、わるいにつけ、この著作は著者の若さのしるしをとどめている。当時私は24才であった。いまでは私はその3倍も年をとっている」

この序言を書いた3年後の1895年の夏、彼は死んだ。

(3) 全集, XXIII, b, 840.

(4) 向坂訳, 『資本論』, 岩波版, 第1巻, 772頁。

(5) イ) 本冊子が、大英図書館に所蔵されていることを知ったのは、一日本人研究者がイギリスから帰朝後、新聞紙上に紹介されたことからである。私は、その研究者のお名前を、うかつにも、記憶にとどめていない。本来なら、ここにそれを記してお礼を申しあげるところである。

ロ) 上記の紹介を見て、私も是非それを読みたいと思い、本学図書館を通じて大英図書館にコピーの送付を申請した。第1回目は出版社の了解がなければと、拒否されたが、2回目の申請でそれが不要なことがわかり入手することができた。送られたコピーは現在本学図書館にある。

ハ) 小冊子であり、私のしらべたかぎり、邦訳されて単行本として出版される機会はなかつと思われるが、なんらかの研究誌等にすでに邦訳されているかもしれない。ここに訳出するにあたって、既訳があるとしてもそれを参照することはなかった。

ニ) しかし、これまで、わが国でもこれが部分的に引用等に用いられている形跡はある。私の知りえたただひとつの例は、早川書房発行の『ミステリマガジン』(誤解のないよう付記するが、同名のかなり猟奇的好色的な雑誌があるが、ここにとりあげるのは日本で唯一の、主として外国推理小説を翻訳紹介する権威ある月刊誌である)に、1979年1月号から、イギリス犯罪史上に有名な「切り裂きジャック」について、仁賀克雄氏が連載されており、その第3回(同誌275号)に、犯罪の発生したロンドンのイースト・サイドの貧民の住宅事情をのべるに際して、本冊子の一部を引用しておられる。雑誌の性格上、仁賀氏による引用ヶ所の指摘はないが、われわれのコピーによれば、以下の部分である。

5 ページ, 12行~17行

5 ページ, 32行~43行

6 ページ, 1行~7行

ホ) 本冊子は、1883年10月、ロンドン、フリート・ストリートの出版社によって出版された。主著者は、ロンドン組合派教会のアンドリュー・マーンズ牧師であり、その文学上の協力者はW. C. プレストン氏である。(ちなみに、カール・マルクスがロンドンで客死したのは、この小冊子が出版された年の3月のことである)

(6) 小節は一般著書のように、明確に区切られているわけではなく、下の第5節の例のように、文中の適当な語句を利用して、節の切れ目を表わしている。

節の番号は筆者が便宜上つけたものである。

Another difficulty with which we have to contend, and one in large measure the cause of what we have described, is the

POVERTY

of these miserable outcasts. The poverty, we mean, of those who try to live honestly;

訳註補足

“…” 部分は太文字で次の様に記されている。

THIS TERRIBLE FLOOD OF SIN AND MISERY IS GAINING
UPON US

旧約聖書の以下の部分を参照。

(Noah was six hundred years old when) the flood of waters
came upon the earth. *GENESIS* vii-6

(The cords of death encompassed me,) the torrents of perdition
assailed me; 2 *SAMUEL* xxii-5, *PSALMS* xviii-4.